

近世西三河地域における木綿流通の地域的展開

岩 崎 公 弥

一 本研究の目的と方法

近世において東海地域は、綿作および綿業の一中心地であった。その中でも西三河地域は、わが国最古の綿作・綿業地であった⁽¹⁾。綿作の発展は当然農間余業としての綿業を隆盛化し、さらにその加工品である繰綿や木綿などの商品の流通を活発にさせるところとなった。

西三河地域における木綿流通・商品化のルートについては、すでに森原・北島らの研究によってかなり明らかにされてきている⁽²⁾。西三河地域は、隣国尾張と違って、小藩領・寺社領・旗本領・飛地域などから成るいわゆる所領錯綜地であるため、各所領域内が一個の経済圏として、独自の経済政策あるいは商品流通統制などを行使するに足る条件を欠いていた。したがって、西三河の木綿流通は、一藩支配地つまり藩領域経済圏を形成していた尾張などとはかなり相違していた。尾張藩では城下町名古屋を中心とする藩領域市場が形成され、一八世紀初期には一宮を始めとする多くの六斎市が開設されて、領主と結びついた特権商人による木綿統制が積極的になされた⁽³⁾。それに対して西

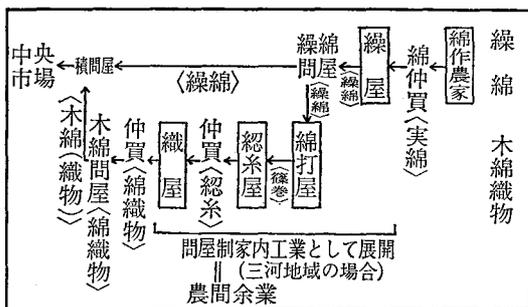


図1 綿の加工工程および商品の流通ルート
〔太田健一：日本地主制成立過程の研究
pp. 14～15に一部加筆〕

三河では尾張藩でみられた如き領主による木綿の流通統制は弱いものであった。したがって、城下町を中心としてその系列下に、在郷町が組み入れられるというような状況は発生しなかったと考えられるし、また領主による統一的な開市も起こらなかった。このように西三河地域は、流通ルートそのものに対する領主統制の欠如、市の不成立という状況にあった。そこでこのような状況下での木綿商品の流通が、いかなる地点を拠点として展開されたかを考察する。これが本稿の目的である。

次に研究方法について述べる。まず綿↓繰綿↓木綿といった加工過程を紹介し、西三河における基本的な木綿製品の取引系統を述べ、その中で特に西三河地域内での木綿流通に対して重要な位置を占める仲買商や買次問屋の動向を明らかにする。その際、仲買人の分布や仲買商と買次問屋の関係、さらに買次問屋による木綿流通統制などを空間的におさえながら考察を加えることとする。

二 綿業と商品化のルート

綿の加工工程は、図1に示した通り、^{みわた}実綿—^{くりわた}繰綿—^{しんまき}篠巻—^{かせいと}繰糸—織物に分化しているが、西三河地域ではこれらの工程はほとんど農家婦女子の余業として行なわれており、専門業者としての繰屋や綿打屋・繰糸・織屋などは一部の地域を除いてあまりみられないようである⁽⁴⁾。もちろんこれらの各製品の流通過程には図中に示したような仲買商

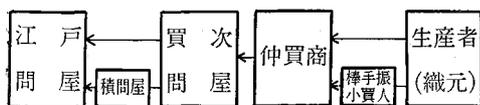


図2 西三河の木綿取引の系統

人が介在することが多かった。このようにして農家―仲買商間の製品のやりとりを経て生産された木綿は、より大きな仲買商の手を経由して、都市の木綿買次問屋へと輸送される。さらに買次問屋は、矢作川河口の港町にある積問屋へ商品を回送し、船を使って江戸大伝馬町木綿問屋や白子組木綿問屋へと木綿を送りこむのである。その状況を略図として示すと図2のようになる。但しこれは最も一般的なパターンであって、この他にも農家から直接買次問屋に、あるいは小買人から買次問屋に持ち込む場合もあったし、信州など江戸市場以外にもわずかではあるが移出されたりもしている。この中で木綿買次問屋は、幕末期の西三河では大体五〜六軒であった。中には買次問屋と積問屋を兼ねる者もいた。

以上が西三河地域における綿加工および木綿流通の概略である。次に図2の取引系統図に示した木綿仲買商や買次問屋の具体的な動向を通して、木綿流通の状況を考察する。

三 流通の担い手としての仲買と買次問屋

(一) 木綿仲買商とその分布

前記のように木綿仲買商とは、生産者と買次問屋の仲介をなし、問屋とともに商品流通機構の中心的役割を果たした者で、これには木綿生産者から直接買入れたり、棒手振などと呼ばれる小買人（小仲買）から買入れたりする者があり、その木綿の取扱い規模もさまざまで、上は年間二〜三万反、下は千反未満の者までであった。次にその代表的な仲買商について記す。

花園村寺田伝兵衛家

東海道池鯉鮒宿の東約四キロに位置する花園村の寺田家は、一七世紀末

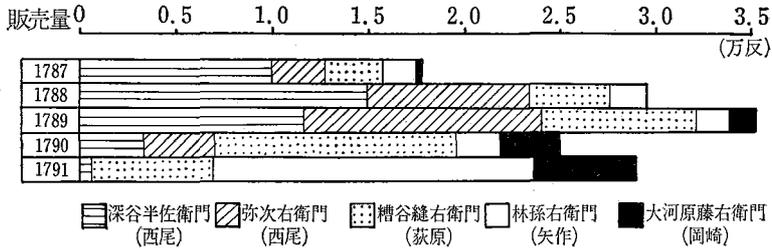


図3 18世紀末における寺田家の木綿売先と売反数
〔森原章：日本産業史体系5 p.75より〕

には持高四六石、元文五年（一七四〇）には村高の二七％に当たる九八石余りを有する地主で、一八世紀初めから酒造業を営むかたわら、同世紀末頃からは木綿・綿の売買も開始している。その他、金貨、肥料、茶製造なども営業し多角的経営を行なう商人であった。原料の綿は地元綿と大坂綿を買い入れ、地元綿の集荷圏はほぼ半径一里程度の近隣一〇か村ほどに当たっていた。具体的な集荷機構は不明であるが、寺田家の経営規模の大きさから考えて、近隣の棒手振などの小買人が同家へ持ち込んだものである。寺田家ではこのように原料綿を買い入れ、問屋制家内工業形態の綿加工を行ない木綿生産をしていたが、寺田家全体の木綿売出货量からみれば、それは全体の一五％程度にすぎなかった。寺田家取扱い木綿のほとんどは周辺農村から織り出された木綿であったと考えられている(5)。

こうして寺田家に集荷された木綿は、図3に示した各買次問屋へと送られた。一八世紀末の五年間だけのものなので、十分なことはわからないが、これから見る限り年間の木綿の売反数は二〜三万反にのぼり、その売出額も最盛年には四千両余となつている。寺田家の木綿経営はこの時が頂点となつている。売先をみるとほぼこの五つの買次問屋に限られているが、各問屋への販売量は年によってかなりの差がみられる。西尾方面への売出が減つてそのかわり矢作・岡崎方面への出荷が増加しているが、この期間だけではそれが全体的傾向であったのかどうかは判断し難い。

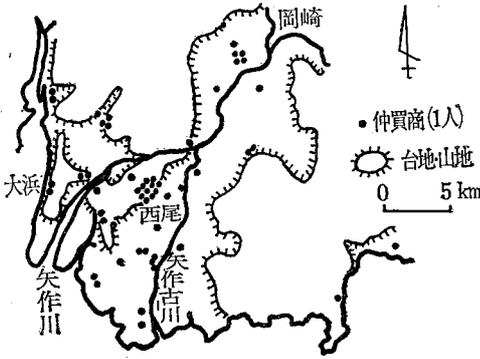


図4 平坂長谷川店の小買い商仲買商の村々
〔西尾市史3 p.958より〕

その他の仲買・小買人 綿作地帯碧海台内に位置する榎前村の斉藤家は、村役人を務めるかたわら一九世紀初期には木綿の仲買業をしていた。斉藤家の木綿取引先からみると、性格的には小仲買に近い。木綿集荷圏は先述の寺田家の場合と同様半径一里内外の範囲である。斉藤家はこれら近隣の村々から数反ないし十数反ずつ買い入れて、これを大岡・桜井・古井・和泉・姫などの村々の仲買商と思われる者一四名に一〇〜一五反ずつ売り渡している(6)。享和元年(一八〇二)時の木綿の総販売量は一三二四反であった。また堀内村の稲垣長右衛門家や矢作川沿いで荷の上げおろしに便であった川島村の太田佐兵衛家なども一九世紀初期に木綿の仲買をしていたことが知られている(7)。

木綿仲買商の分布

先述のように仲買商にも規模の大小があり、規模の小さい仲買商は織元から直接木綿を買い取っていたが仲買人への前渡し金として、二〇〇両、三〇〇両などという大金を貸し付けられる仲買商は、その下にさらに数人の小仲買人を従えていたと推測されている(8)。したがって、小仲買人と仲買商の判別は難しい。また買次問屋の数に比して仲買商の数は格別に多く、同時に木綿商売に継続性がなく、したがって西三河全域での木綿仲買商の分布を正確におさえることは不可能である。よって、ここでは史料の残存する一部地域の状況からその分布の特色を考えてみたい。

図4は、平坂の木綿買次問屋長谷川家所属の小買商・仲買商の分布を示したものである。長谷川家(9)は集荷体制の中核となる仲買商に対し「木

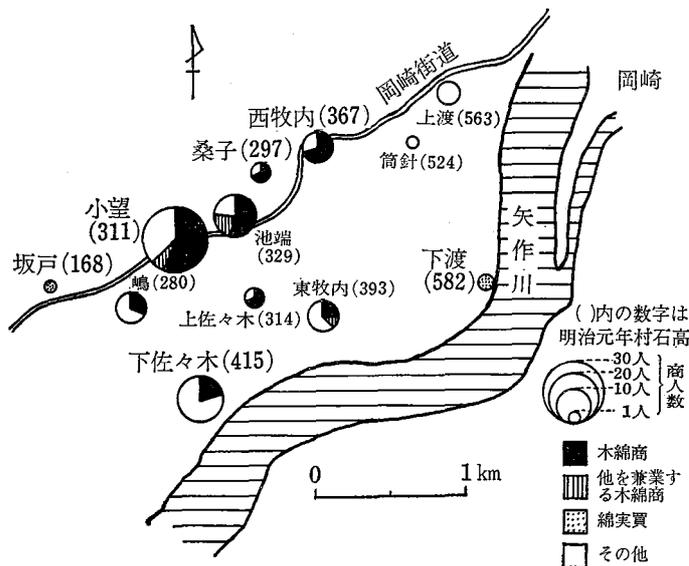


図5 江戸時代末期矢作川沖積地農村における木綿商人の分布
〔文久2年(1862)小望村他11ヶ村諸商売書上帳より作成〕

そこには別の理由も考えられるのでないかと思われる。図5は文久二年(一八六二)の低地部農村の一部における木

綿繰綿内渡し金」すなわち木綿集荷のための貸し付け金を渡しているが、図中の商人達はその貸し付け金を貸し付けられた者達である。分布の特徴として、まず平坂近辺の村々や西尾城下に多くの仲買商が分布していることがわかる。また矢作川右岸すなわち碧海郡地域では、碧海台地周辺部の村々に商人の分布がみられる。このように丘陵部に入ると全く仲買人の分布がみられない理由として、綿作地と非綿作地(丘陵部)が立地条件によりはっきり分かれていたことに起因するとも考えられているが⁽¹⁰⁾、丘陵地農村がかならずしも非綿作地とは言えないし⁽¹¹⁾、また前記のように榎前村の斉藤家のように丘陵上の村でありながら木綿仲買を営む者もみられるので、この理由を綿作立地論から説明するのは難しい。ただ元来、丘陵には村の分布が少ない点は、当然仲買商人の分布を低くさせていると考えられるが、木綿の集荷という点から考えると、

指向した結果と考えることができよう。したがって木綿仲買商の立地は、交通路指向型と言えよう。

(二) 木綿買次問屋とその分布

買次問屋は前記の仲買商によって集荷された木綿を買い入れ、これを積問屋へと回送する問屋で、西三河全域での木綿集散の実際的拠点をなすものである。三州木綿買次問屋についてその起源は不明であるが、およその台頭時期は一七世紀後期と考えられている⁽¹³⁾。史料的に最初に確認されるのが、一八世紀初期宝永期の木綿買次問屋で、計一三軒の間屋がみられる⁽¹⁴⁾。所在地不明の者が多く今後の追跡調査が必要であるが、判明している中では、岡崎・矢

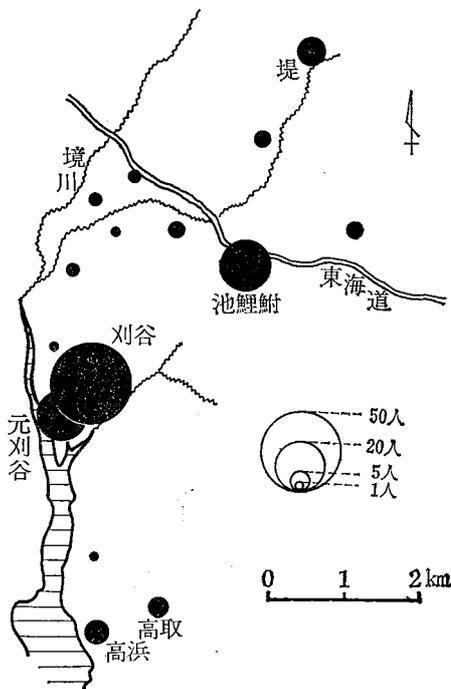


図6 幕末刈谷藩における鑑札所有の綿木綿出商人の分布
〔嘉永7年(1845)刈谷町御触留帳より作成〕

綿商人の分布を示したものである。これから岡崎街道に沿う村々において木綿商人の発生がより多くみられることがわかる。また同様に図6の刈谷藩領においても木綿商人の分布の中心は、刈谷城下町と東海道宿場町池鯉鮒である。また榎前村の斉藤家や堀内村の近藤家などの木綿売出先をみると、その多くは街道沿いの村であることからして⁽¹²⁾、木綿や繰綿の仲買商の分布は、交通上有利な地点(特に主要街道)を

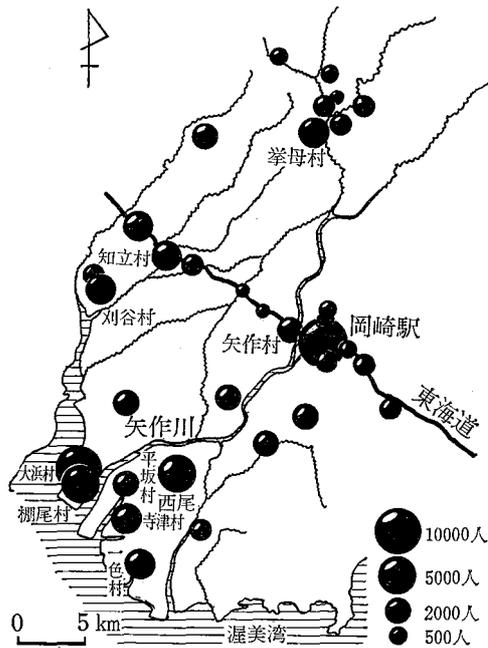


図7 明治初期西三河における都市の分布と人口規模

〔明治12年共武政表より作成〕

作・西尾の買次問屋の存在が知られる。それ以外の問屋の変遷は不明であるが、これら十数軒の買次問屋も一八世紀末には、六乃至七軒に整理されてくる。つまり一八〇〇年前後の西三河の木綿買次問屋としては、岡崎の大河原藤右衛門・矢作の林孫右衛門・西尾の深谷半左衛門・西尾の弥次右衛門・荻原の糟谷縫右衛門・平坂の外山儀左衛門・新堀の深見佐兵衛などをあげることができる。これらの買次問屋の分布の特徴は、新堀の深見佐兵衛を除くと他はすべて矢作川沿いの都市部に集中していることである。

また幕末に上矢田村の坂田吉助が江戸仮組の木綿買次問屋開業を申請した際、「当国に木綿買次職の者刈谷耆軒、拳母に耆軒、岡崎に耆軒、三軒これ有り候」と記しているところから、刈谷・拳母の両城下町にも木綿買次問屋が存在していたことがわかる。

そこで明治初期における西三河の都市的集落の分布を示せば図7の如くである。このように木綿買次問屋は木綿の大量集荷に好都合な矢作川沿いや地方中心の都市たる城下町を拠点として分布していたと言えよう。

四 木綿流通の地域的展開

(一) 仲買仲間と流通ルート

西三河の買次問屋は江戸の特定（大伝馬町組・白子組・仮組）の木綿問屋と取引関係を結んでおり、「仲買荷物へ買取、小買荷物へ仲買へ買取、両方共右之仲間内取引へ不相成様疋と取締相附有之」（三州買次問屋書状）というように、小仲買―仲買―買次問屋という系列で木綿が売買されていた⁽¹⁶⁾。このような流通ルートを確実なものとするため江戸中期には次の如き仲買商の組分けとそれらを掌握する買次問屋が指定されていた⁽¹⁷⁾。

- 上石大組、矢田同小組、桜井組……深見佐兵衛（新堀）
- 北野組、岡崎組、山が組……大河原太郎右衛門（岡崎）
- 西尾組、片原組……深谷半左衛門（西尾）
- 刈谷組、池鯉鮒組、堺組……重原某（重原）
- 横須賀組、中嶋組、土呂組……糟谷縫右衛門（萩原）
- 西端組、川西組……外山徳太郎（平坂）

このような江戸木綿問屋による流通統制の規制は、小買、仲買、買次問屋のそれぞれの間での相互取引による木綿価格の上昇を危惧したものと考えられている⁽¹⁸⁾。しかしながら実際にこのようなルートがどれほど厳しく守られたかどうかは疑問である。たとえば図3に示した如き花園村の寺田家は岡崎・西尾などの買次問屋へ木綿を売っているし、新堀村の仲買商深見喜兵衛は、文政十一年（一八二八）正月には、同村新堀の深見佐兵衛、桑子の野村、岡崎の大河原、西尾の深谷へ合わせて一五八兩二分、反数にして約一五〇〇反程を売却している⁽¹⁹⁾。また禁止されている

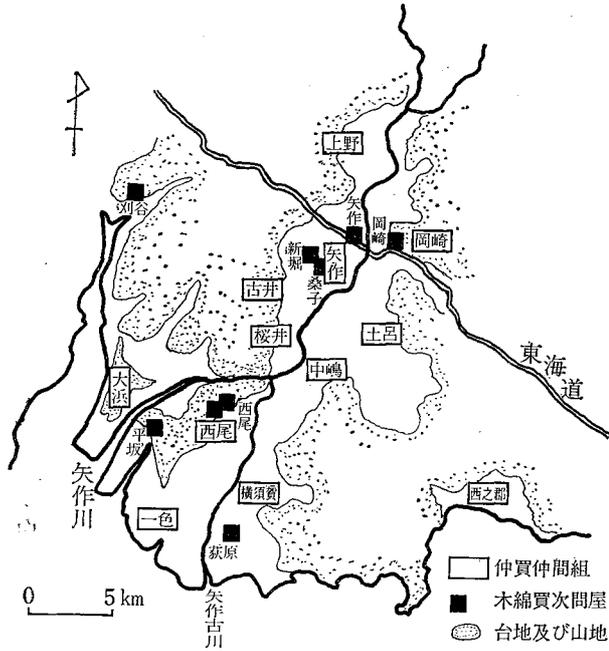


図 8 天保10年(1839)の仲買仲間組と1800年前後の木綿買次問屋の所在地

八三九)には仲買組織の編成替えが行なわれたりしている。図8はその時の仲買仲間一二組の分布である。各仲買仲間では、小買株鑑札などを発行し木綿取引を株組織によって統制していた。たとえ西郡組の小買株鑑札には、帳元二人、行司一二人の名と村名が記され、西郡組の地域的範囲を知ることができる。それはほぼ現在の蒲郡市域に

はずの仲買相互間の売買も行なわれ、ついには買次問屋の手を経ずに仲買が荷を直売するに至る状況もみられ、天保期には「全体不織出しにて物払底之処、益前も当地仲買内々にて送り荷被致候仁有之、買先勢ひ能被買立候故少々宛之品も直に相片付、右故人氣立、緩ミ不申」(20)という具合に、天保期の折からの綿不作にともなう品不足と全国的木綿需要の拡大とのアンバランスが綿価格の高騰を生み、商人達は先を争って綿を買い集めるといったいわゆる「地場の買荒し」状況が生まれていた。このように流通ルートは地域の崩壊とともに、小仲買一仲買一買次問屋という縦の系列規制の緩みもみられるようになってきた。そのためか天保一〇年(一

相当（但し東の大塚地区を除く）する広い範囲にわたっており、その中の一仲買商である平野弥太郎家は、文久元年（一八六一）には土呂・荻原・横須賀などの商人らとの間に木綿の取引があったことがわかる⁽²¹⁾。また天保一〇年に定められた大伝馬町組及び白子組木綿問屋とこれら一二組の木綿仲買組との間の規定には次の如きものが含まれていた。それらは、他国売の禁止、無株者との取引の禁止、仲間取引の禁止、新株取得として金五両差出すこと及び株譲渡の禁止、仲間積立金などの仲間関係の規定等を含んでいる。このように西三河地域の木綿流通は、一部を除いて領主的規制を受けなかったかわり、江戸木綿問屋の強い影響力の下にあった。

(二) 西尾藩における木綿流通統制

前節で示した天保一〇年の規定においては、西尾組は特殊な扱いを受けている。規定の中で「西尾組之義は、年々御殿様江御冥加上納御鑑札被下置、株式百株ニ御定新株加入之義決而不相成候ニ付、讓株之義致勝手、其時々両組問屋中江相届可申事」とあるように、株所持の仲買商に藩が株金と冥加金の賦課を義務づけ、その証しとして営業免許の鑑札を授与していた⁽²²⁾。この藩による仲買商の把握は、実際には藩より免許を得た買次問屋の手を通してなされていた。この職に当たった者が、西尾城下において以前から木綿買次問屋を営んでいた深谷半左衛門家であった。つまり「木綿仲買商売冥加金半左衛門方へ取り集め同人々役所へ相納め候様」（御触状留帳）と規定され、深谷に冥加金の取りまとめの任務を藩は委嘱している⁽²³⁾。さらに領内の仲買株数を限定し外売りや抜け荷を防止し、木綿流通ルートを買次問屋を通して掌握せんとしている。藩の直接の目的は上納金・冥加金収入の増加にあり、幕末には株数の制限規定廃止の動きをみせるようにもなってくる。万延二年（一八六一）には西尾の太田伊八や上矢田村の坂田吉助が藩より非公式ながら繰綿、総糸^{かさいと}の買次職の免許を得、さらに慶応二年（一八六六）には、太田次いで坂田らが深谷

と並ぶ木綿買次職として藩より免許を得るに至っている。西尾藩におけるこのような特権商人の設定による木綿の流通制は、縦の支配関係の確立をめざしたものであり、他国諸藩における木綿の国産専売によって利潤を得ていたのと対比できよう⁽²⁴⁾。西三河地域において西尾藩のみが、木綿流通に領主的統制を加えた背景としては、やはり矢作川下流の本地域が綿作の核心的地域であるとともに、木綿流通上矢作川河口を占めるといふ位置的条件から極めて重要な地位を有していたということが考えられる。

(三) 問屋分業化への動き

従来、三河地域における綿関係問屋の専門分化、すなわち繰綿問屋、綿糸問屋、木綿問屋などへの分化は、あまり高く評価されていない⁽²⁵⁾。しかしながら、西尾藩では木綿買次職、繰糸買次職、繰綿買次職などはそれぞれ藩の許可を必要としており、問屋営業免許は分化していた。ただし西尾藩領内には、古くから木綿買次問屋として深谷家があり、同家は繰綿・繰糸なども取り扱っていた。また前記の坂田家は藩との結びつきと資本を背景として、江戸の二番組(仮組)と白子組の買次問屋を始め、繰綿・繰糸の売買、木綿小買職、晒木綿業、塩問屋、正米業、平坂では入船問屋等を多角的に経営している。このような姿は、三河木綿商人の特色でもある⁽²⁶⁾。

そのような中であつて、新堀村の深見太郎右衛門と深見佐兵衛の場合をみると、彼らは江戸大伝馬町組に属する商人であるが、当初新堀村で木綿・繰綿の買次問屋を営んでいた深見太郎右衛門家は、その後新たに木綿買次問屋を営業しはじめの深見佐兵衛家とともに、当地域の木綿売買の中心にあつた。ところが、

一 札之事

金三百三拾壹両ト拾匁

右者江戸大伝馬町木綿買次問屋株、是迄御仲間持ニ御座候所、此度御相談之上入札ニ罷成、貴殿御持之分前書金高ニ而落札ニ付、買取申所莫正也

右之金子来巳ノ十一月限無相違相渡可申候、為後日一札依如件

寛政八年

辰ノ七月廿四日 深見佐兵衛(印)

深見太郎右衛門殿 一(27)

とあるように、寛政八年(一七九六)にはそれまで仲間持であった大伝馬町木綿買次問屋株の分離が起こり、木綿買次問屋職は深見佐兵衛家を中心となり、一方、繰綿買次問屋職は深見太郎右衛門家が担当するといった具合に問屋の分業化がみられることを指摘しておきたい。

(四) 木綿流通と積問屋

さて買次問屋より積問屋への木綿荷の輸送はいかなるルートでなされたのであろうか。これについてはあまり具体的な史料は残っていない。ただ買次問屋の分布等から考えると、その輸送路として舟運が使われたと推察される。特にその中心をなすのは矢作川で、下り荷では中流部の岡崎からは四半日程で河口まで航行できたと言われる。特に矢作川河口に面する中畑村には、文政一二年(一八二九)に七〇艘、幕末の最盛期には一〇〇艘もの川船があり、流域最大の川船舟運の基地であった。そこで幕末期の矢作川河口の新田造成は「中畑村田貫村之義者田畑少ニ而農業而已ニ而者渡世難相成、殊ニ人家多之村方ニ而往古る川舟渡世仕来候処、小栗新田出来後平坂湊迄海面遙冲手江乗回り甚タ難洪ニ御座候」(28)とあるように当村にとっては非常な不利益をもたらしたようである。農民が買次問屋へ直接持込んだり仲買が問屋へ送るような小口の木綿流通ルートは、舟運によらない場合が多かったが、大口大量の木綿荷の

輸送には運賃の安価なこのような舟運が多く利用されていたと考えられる。たとえば新堀村の木綿買次問屋深見佐兵衛は、木綿荷の通行のため東本郷村に対し、道幅の拡張（六尺から九尺へ）を要請し、その資金の提供も申し出ている⁽²⁹⁾。このことから深見佐兵衛は、東本郷村を経由して矢作川の渡場へ木綿荷を移送していたと推測される。

各地の買次問屋に集められた木綿類は、このようにして矢作川河口にある積問屋へと輸送され、そこから積問屋の持ち船によって江戸市場へと航送された。したがって三河木綿の積出しは、鷲塚・平坂・大浜・高浜などの矢作川河口部一帯及び衣浦湾岸の港町を拠点として分布する積問屋の手によってなされたのである。中でも平坂・大浜には大きな回船問屋があり繁栄していた⁽³⁰⁾。明和元年（一七六四）の平坂港よりの木綿積出し量は、実に一万梱（約九〇万反）に上り「平坂木綿」の名がつけられていた。積出港の名がこのように商品の名として用いられている点からも、当時の港町の商業上の地位の高さをうかがい知ることができる⁽³¹⁾。また天保十一年（一八四〇）に大浜港から積み出した江戸売り繰綿の量は約三万貫、金額にして一万三八〇〇両、嘉永元年（一八四八）には七万六〇〇〇貫、二万八七〇〇両に達していた⁽³²⁾。

江戸大伝馬町木綿問屋は、産地からの木綿入荷をより円滑、確実なものとするために、天明六年（一七八六）に回船仕法書を三州木綿問屋や積問屋に対して制定している⁽³³⁾。これによって三河の問屋衆は江戸の木綿問屋仲間から、積出手続や積出個数などについて細かい指示や厳重な申し入れをされている。江戸木綿問屋はそれゆえに三河各港の回船業者に対し、回船建造費の援助として多額の貸付金を与えている。海上輸送の安全性を確保する上で、正規の回船業者を取り立てることが重要であったと考えられる。事実、素人積みによる洩積みも存在していたようである⁽³⁴⁾。このように回船業者、すなわち三河木綿の積問屋は、江戸問屋と三河買次問屋との接点をなす存在であった。

五 まとめ

西三河地域、特に矢作川下流域は尾西地方と並ぶ東海地方屈指の綿作地帯であり、またそれを背景とした綿業、さらに活発な木綿製品の流通がみられた地域であった。尾張藩一円知行の尾張の木綿流通が江戸木綿問屋の支配とともに領主の強い影響力のもとに展開されたのに対して、西三河地域は所領錯綜という政治的条件によって木綿流通は領主統制が比較的弱く逆に江戸木綿問屋の強い支配下に置かれていた。このような流通上の特色を持つ西三河地域の木綿流通の状況を、地域的視野からみると次の如き特色をさらに指摘することができる。

まず第一に木綿流通の軸となるのは、農民より木綿を買い集める仲買商、さらに彼らより集荷した大量の木綿を積問屋へ回送するいわば西三河の木綿集散の核的中心に位置する買次問屋、そして最後に買次問屋から送られた木綿を江戸の間屋へ航送する港町所在の積問屋の三者である。

第二にこれら各商人の分布の特色をみると、まず仲買商は周辺農村からの木綿集荷上好都合な街道沿いの村々に多く分布し、いわば交通路志向型の立地をしている。次に買次問屋は大量の木綿を扱うので、大量木綿の集散に便の良い地方中心城市に主として分布し、矢作川水運を利用して港町へ木綿を輸送した。いわば買次問屋は都市志向型の立地をしている。そして最後に積問屋であるが、これは江戸回船を仕立てる上からも、矢作川河口、衣浦湾岸などの港湾を持つ都市が選ばれることとなった。このような大きな港には積問屋すなわち回船問屋が数軒みられ、当時における港町の人口規模は地方の城下町にも匹敵する程であった。

第三に西三河地域の木綿流通が全体として江戸木綿問屋の強い支配下にあった中であって、西尾藩のみはさらにそ

の上に特権的商人の取立てによって木綿の流通に領主的統制を加えている点で注目される。西尾藩がこのような形で木綿統制による利益を得ようと企てた背景には、当地域が綿の中心的産地でありかつまた木綿流通上、西三河各地の木綿が積問屋の多く存在する当地域へ大量に集められるという位置的重要性があったと考えられる。

最後に木綿問屋の專業分化という現象が一部地域でみられたという点も注目される。また他の史料からは港町を中心として線綿仲買問屋が多く分布している状況が知られる⁽³⁶⁾。しかしなお全体としては、西三河の木綿問屋の分化は低いと言われ、また木綿機業も尾西地域の如きマニファクチュアへの進展がみられず、専ら問屋制家内工業に留まっていた⁽³⁶⁾。これもまた西三河木綿生産の一つの特色と言えよう。

注および参考文献

- (1) 三河国はわが国への綿種の最初の渡来地（七九九年天竺人の漂着）であるとともに、永正七年（一五二〇）には奈良興福寺の記録「永正年中記」にも、「三河木綿」の名があらわれている。
- (2) 森原章「三河・知多の白木綿と有松絞」（地方史研究協議会編『日本産業史大系5・中部地方編』東大出版会、一九六〇）、五四～六七頁、北島正元編著『江戸・商業と伊勢店』吉川弘文館、一九六二、六八七頁
- (3) 森原章「幕末尾張藩における木綿生産と木綿統制（一）（二）」、愛知学芸大学研究報告、五・六、一九五六・一九五七
- (4) 生産形態としては、問屋制家内工業の形態をとっている。岡崎においては、享和元年（一八〇一）には、町全体として木綿・綿商二一名、他を兼業する木綿商六名、綿実買六名などの他に、綿打職人が二四名含まれている。しかもこの綿打職人は岡崎城下町東部の両町、祐金町、裏町、伝馬町などに集中しており、一方木綿・綿商人は城下町中央部の連尺町などがその分布の中心となっている。
- (5) 近藤正典「近世三河綿業地に於ける問屋経営について——愛知県碧海郡高岡村寺田家について——」愛知学芸大学歴史研究、二、一九五四、二八～三六頁
- (6) 明治村史編纂委員会編『明治村史 上巻』同会発行、一九六六、三一七～三二〇頁

- (7) 安城市史編さん委員会編『安城市史』安城市役所、一九七二、六二三～六二六頁
- (8) 前掲(2)北島正元編著本、四九六～四九九頁
- (9) 木綿問屋長谷川家は、伊勢松坂にある長谷川次郎兵衛を本家とする五軒の木綿問屋である。一八世紀初頭以降長谷川家における江戸木綿店の比重が増し長谷川本家総資産の七〇%から八〇%を占めるに至っている。この長谷川家が天保六年(一八三五)頃より、平坂の木綿買次問屋外山徳太郎家の経営不振によってその店の譲受交渉を行なった。天保八年(一八三七)に西尾藩の調停などにより両者の和談となり、三河平坂に長谷川家の木綿買次問屋が開店されることとなった(前掲の北島編著本による)。
- (10) 前掲(2)北島正元編著本、四九七～四九八頁。
- (11) 西三河の綿作は、矢作川低地のみならず広い部分を占める碧海台地も重要な綿作地であった。たとえば台地上の和泉村や榎前村では本畑高の半分以上が綿高であった。
- (12) 前掲(7)
- (13) 前掲(2)北島正元編著本、二三八～二四一頁。
- (14) 宝永期(一七〇四～一〇)の「差引帳」にみられる三州木綿商として次の名がみられる(前掲の北島正元編著本、二三九頁)。岡崎居住と思われるのは、寺部弥右衛門、寺部清右衛門、山本甚兵衛、大河原藤右衛門、鈴木伝左衛門、神谷平七らであり、西尾には深谷半左衛門、矢作には林孫右衛門、その他所在地不明ながら、寺部弥三郎、鳥居六左衛門、天野左介、太田甚兵衛、宮地忠兵衛らの名を挙げることができる。
- (15) 西尾市史編纂委員会編『西尾市史第三卷』西尾市、一九七六、九三五頁
- (16) 前掲(2)北島正元編著本、二三八～二四八頁
- (17) 前掲(15)、九二二～九二三頁
- (18) 掲前(15)、九二二頁
- (19) 新編岡崎市史編纂委員会編『新編岡崎市史 史料 近世上 七』新編岡崎市史編さん委員会、一九八三、八九八頁
- (20) 前掲(2)北島正元編著本、四八二頁
- (21) 蒲郡市誌編纂委員会・蒲郡市教育委員会編『蒲郡市誌』蒲郡市、一九七四、四八一～四八四頁

- (22) 前掲(15)、九二九頁
- (23) 前掲(15)、九三六頁
- (24) 木綿や綿を藩が専売ないしそれに類似した制度を持っていた例としては、尾張藩(実施期間、天保一三年～嘉永六年)、龜岡藩(同、天保頃より廢藩まで)、姫路藩(同、文政四年～廢藩まで)、福山藩(同、天明頃)、今治藩などがあげられる(下中弥三郎編『日本史料集成』平凡社、一九五六、三九一～三九二頁)。
- (25) 前掲(2) 森原論文
- (26) 前掲(15)、九三九～九四三頁
- (27) 前掲(19)、九〇四～九〇五頁
- (28) 西尾市史編さん委員会編『西尾藩の新田』西尾市、一九七一、三四二～三四四頁
- (29) 前掲(19)、九二五～九二六頁
- (30) 平坂の回船問屋としては、市川・外山・新実・鍋屋などがあり、明和元年(一七六四)には七〇〇石積以下の江戸回船七、その他三、川船一〇艘があった。大浜の回船問屋としては、七右衛門・九郎右衛門・八郎右衛門があり、寛政一〇年(一七九六)には九〇〇石積以上の江戸回船八艘があった。
- (31) 八木哲浩『近世の商品流通』塙書房、一九六二、二八～二九頁
- (32) 碧南市史編纂会編『碧南市史 第一巻』碧南市、一九五八、三三一～三三二頁
- (33) 前掲(2) 北島正元編著本、二四六～二四七頁
- (34) 安政六年(一八五九) 大浜の繰綿買次問屋千賀又左衛門が素人積を行なったために江戸問屋より注意を受けている(これは、岡崎市史編さん室の藤井寿一氏より御教示賜った。記して感謝申し上げます)。
- (35) 三河の繰綿買次問屋として知られるのは、深見大郎右衛門(新堀)、千賀又左衛門・綿屋庄右衛門(大浜)、千歳屋七兵衛(棚尾)、小野屋勝助(西尾)、片山八治郎(鷺塚)、市川平治郎(平坂)などがいた。

本稿は昭和五八年度歴史地理学会大会において研究発表した内容に加筆・訂正を行なったものである。